

和歌の句切れに関する一考察

——新しい認定基準私案の構想——

浅岡純朗

一、解釈文法としての句切れの定義と認定基準

和歌における句切れの定義として「第五句（結句、末句）以外の句の終わりに意味上の切れ目があることをいう。」、句切れの認定基準として「さまざまあるが、文法的に見て句が切れているものにだけ句切れを認めるという立場が、客観的な態度として望ましい。」（『和歌大辞典』昭和六一年三月・明治書院・二五六頁）とする通説の考え方に基本的には異論がないものの、実際の認定となると、定義と認定基準との間に微妙な違いを生ずる場合が少なくない。

今、ある和歌がこの定義に合致する（○）か否（×）か、認定基準に合致する（○）か否（×）かを組み合わせ、図示すると、次のように四つの判断領域が設定できる。

		I 定義		II 定義	
		基準	○	基準	○
		III 定義		IV 定義	
		基準	○	基準	×

領域Ⅰは名実ともに句切れがあると認められる領域であり、逆に、領域Ⅳは句切れがない、いわゆる無句切れの領域である。この典型的な二領域について、通説は、次のような例をあげている。

初句切れ 契りきな かたみに袖をしばらくつつ末の松山浪こさじとは（後拾遺恋四・七七〇）

二句切れ いづくにか船泊てすらむ 安礼の崎こぎたみ行きし棚無し小舟（万葉卷一・五八）

三句切れ 月みればちゞに物こそ悲しけれ わが身ひとつの秋にはあらねど（古今秋上・一九三）

四句切れ 阿騎の野に宿る旅人うちなびきいも寝らめやも 古へ思ふに（万葉卷一・四六）

初句・三句切れ 秋は来ぬ 紅葉はやどに散りしきぬ 道踏みわけて訪ふ人はなし（古今秋下・二八七）

二句・四句切れ 春過ぎて夏来るらし 白たへの衣ほしたり 天の香具山（万葉卷一・二八）

無句切れ 逢ひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり（捨遺恋二・七一〇）

これらに比べ、問題となるのは、意味上の切れ目はあるが文法的に見ると句が切れていないもの（領域Ⅱ）、意味上の切れ目はないが文法的には句が切れているもの（領域Ⅲ）の扱いである。具体例をあげると、前者では

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か（古今卷一・春歌上・二七・僧正遍昭）

みわたせば柳桜をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける（古今卷一・春歌上・五六・そせい法し）

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる（古今卷四・秋歌上・二四八・僧正遍昭）

なびかじな海人のもしほ火たきそめてけぶりはそらくゆりわぶとも（新古今卷一二・恋歌二・一〇八二・藤原定家朝臣）

などがある。一首目「いとよりかけて」の「て」は「糸をより合わせ、（その糸で）」と一つの動作や状態が終わり、引き続いて次の動作、状態に移ることを示す接続助詞、二首目「柳桜をこきまぜて」の「て」は連用修飾の関係を示す、下に来る用言の態様、手段、方法などの内容を限定する働きをもつ接続助詞、三首目「さとはあれて」の「て」は事柄や動作、状態などが同時に並立して存在することを示す接続助詞、四首目「もしほ火たきそめて」の「て」は「て」によって続けられる前の句と後の句とが順接的に原因と結果の関係になっている接続助詞であるが、これらの接続助詞「て」によって続けられる前の句と後の句はいずれも相互に独立しており、各々の主述が完結している。つまりは、前・後の句ともに文として成立かつ独立しているにもかゝらず、その間を接続助詞「て」がつかないでいるばかりに、意味上の切れ目はあっても文法的に句が切れていると認定されないのである。他方、後者では、一定の解釈操作を加えないと意味上の切れ目を確認できないのに、文法的には句が切れているとして句切れを認定しているものがある。例えば、次の歌。

しるらめや霞の空をながめつつ花もにははぬ春を嘆くと（新古今卷一・春歌上・三九・中務）

しるべせよ跡なきなみにこぐふねのゆくへもしらぬやへのしほかぜ（新古今卷一一・恋歌一・一〇七四・式子内親王）

ここにしもわきていでけんいはし水神の心をくみてしらばや（後拾遺卷二〇・神祇・一一七四・増基法師）

などがある。一首目の初句「しるらめや」は「知っているのかなあ」の意で疑問の終助詞「や」、二首目の初句「しるべせよ」は「案内してくれよ」の意で動詞「しるべす」の命令形、三首目の二句「わきていでけん」は「湧いて出たのである」の意で過去推量の助動詞「けむ」の終止形であって、それぞれ文法的には確かに句が切れてはいる。しかし、意味上

の切れ目になっているかという点、主述が完結しておらず、「読者は下の句の終りまで読んだうえで、上の句全体をもう一度読みなおして、下の句の「predicate」にあたる上の句とのかわりにおいて、作品全体の意味を理解する」⁽¹⁾ 必要が生ずるのであって、とくに倒置表現にあっては、このような解釈操作を前提に句切れを認定しているのである。また、次の歌。

秋ふけぬなけや霜よのきりぎりすややかげさむしよもぎふの月（新古今巻五・秋歌下・五一七・太上天皇）

「秋ふけぬ」のあとに初句切れ、「ややかげさむし」のあとに四句切れを認めることは首肯できるとして、「きりぎりす」のあとに三句切れを認めるか否か。通説に従えば、二・三句と四・五句は相互に独立し、かつ、それぞれの主述が完結している「文」であって、まさしくその間に「意味上の切れ目」があるから三句切れを認めることになるであろう。この場合、二句「なけや霜よの」が割れているので句切れの問題が顕在化しなかったが、仮に「霜よになけや」となっていたら二句切れも認めなければならず、一つの文に二つの句切れを認める結果になっていた。次の一首などは、上の句一つの文に初句切れ、三句切れの二つの句切れを認めることとなるよい例であろう。

なけやなけよもぎがそまのきりぎりすすぎゆく秋はげにぞかなしき（後拾遺第四・秋上・二七三・曾禰好忠）

二、認定基準私案の基本的考え方

和歌の句切れの新しい認定基準私案を構想するに先立って、稿者の文論上及び語論上の国語学的立場を明らかにしておきたい。

（一）文論上の整理―大久保文法⁽²⁾の援用

まず、和歌の句切れの定義である「意味上の切れ目」は、文の切れ目と同義に考えることができ、それは、文論レベルという文の成立そのものであって、具体的には、「主述の完結」がある場合に、その後「意味上の切れ目」を原則的に認

めようとするものである。

大久保（忠利）氏は、稿者の文法学上の恩師であり、かつ、チョムスキー（Noam Chomsky）の生成文法のわが国における最初の紹介者の一人であるが、この「主述の完結の確認」という作業に、大久保氏の言う「核文」の成立・独立の確認という方法を用いることとした。大久保氏は、その著書『増補版 日本文法陳述論』（昭和五七年八月・明治書院）の「日本語構文論の構想」の中で、「文のカナメに判断がある」として、「判断」とはまさに、言語的には「主部について何かを述部すること」なのだとされた。その基本の文型が「核文」であり、日本文の四種の核文を例示（文語文例は稿者）している。

動詞述語文―鳥が飛ぶ。鳥（ガ）飛ぶ。

形容詞述語文―雪ハ（ガ）白い。雪（ハ・ガ）白し。

形容動詞述語文―林ハ（ガ）静かだ。林（ハ・ガ）静かなり。

名詞述語文―太郎ハ学生だ。太郎ハ学生なり。

同氏は、「これらの文は、それぞれが主・述から成って」て、「核文とはこういうものであり、それが加工・変形されて複雑な思考を言表する」ことになるという。核文の構成については、

「修体、修用をとまわらないで、

主部―体言（＋助詞）

述部―補語＋述語用言（終止形）

だけから成るものを想定して核文とした。（中略）「補語」は、その文での用言がその意味・機能的特性から要求するもの・核文にとって不可欠の成分と見た。」

としている。文の原型ともいえる核文は、連体修飾語(部)、連用修飾語(部)を伴うほか、使役化・受動化、述語用言の活用、否定、省略、倒置、文の性格決定(疑問、命令、感嘆など)の変形が加えられて具体的な「単位文」となり、文の構造上の分類でいえば

「1単位文—単位文一つでできている文

2重文—単位文二つ以上が論理的な関係で連続している文

3複文—単位文が他の単位文の構成要素(節)になっている文」

というような複雑な現実の文が形成されるというのである。

要するに、和歌の句切れを扱う際に、最初の、かつ、最重要の手続きは、「核文の成立と独立の確認」ということである。具体的には、当該和歌一首を「複雑な現実の文」とみなして、まず「単位文」に分解し、次にその単位文から「付加的諸成分・諸変形をとり去ってもとの核文としてとらえ」直し、その成立と独立を確認することである。核文の成立と独立が確認されればその後に「意味上の切れ目」があつてよいことになるし、逆に、確認ができなければ「意味上の切れ目」はあり得ず、従つて、句切れも認められない、ということになる。

(二) 語論上の整理—言い切りの認定と句切れの位置の決定

上記(一)による核文の成立・独立が確認されると、その核文(または、その核文を含む単位文)の後に、句切れの定義である「意味上の切れ目」があると推定されることになる。そのうえで、語論レベルにおける文の終止が、句切れの位置を決定するために重要な役割を担う。

① 言い切りの認定

橋本文法によれば、「文節は、続くか、文の終止として言い切りになるかどうか」(『日本文法大辞典』昭和四六年一〇

月・明治書院・七三九頁）であり、①「続く文節」は、一つの文において、切れる文節以外のすべての文節、②「切れる文節」は、文の最後にあつて、そこで文が終結する文節（一つの文では、普通一つだけである。）としているが、この概念を和歌でいう「句」、「句切れ」にも当てはめると、「切れる核文（または、その核文を含む単位文）」という考え方にたどり着く。この「言い切り」は、和歌の句切れの認定基準に該当することを客観的・形式的に確認できるものでなければならず、具体的には、①活用語の終止形、②活用語の終止形と同類の機能を有する活用語の命令形、係り結びの結びの連体形または已然形、③文のおわりにあつて疑問、禁止、詠嘆、感動などを表わす終助詞の後に「文法上の句の切れ目」を原則的に認めようとするものである。前記一で述べたことの繰り返しになるが、問題は、「意味上の切れ目」は具備するが「文法的に見て句が切れている」は具備しないもの（領域Ⅱ）、逆に後者は具備するが前者は具備しないもの（領域Ⅲ）の扱いであつて、先行研究の多くは、領域Ⅱについては狭く、領域Ⅲについてはかなり広く句切れを認定している。

新しい認定基準私案の構想では、領域Ⅱについても核文の成立・独立（具体的には主述の完結）が確認され、かつ、後文との接続関係が軽度なもの、例えば次の歌の

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か（前出）

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる（前出）

一首目の二句「いとよりかけて」の事実の継起・継続を表わす接続助詞「て」、二首目の初句「さとはあれて」の事実の並立・並存を表わす接続助詞「て」の二種類の「て」に限っては、「文法的に見て句が切れている」範ちゅうに含めてよいのではないか。その理論的根拠は中止法（連用中止法）に求めることができる。

また、「和歌における「連体止め」に見られるように、連体形で文を言い切るやりかたは、あとに何かを期待させ、余情をこめた表現となり、当時の人々に好まれた。そして、ついには連体形で言い切ることがもっぱら」（『日本文法大辞典』

昭和四六年一〇月・明治書院・九一六頁）となったが、この連体止めには、

①「ぞ」「なむ」「や」「か」などの係助詞が上にある場合に文の結びとして用いられるもの（係り結び）

② 係助詞がない場合でも連体形で結ぶ

という二つの場合がある。係り結びの例として、

うぐひすのなくねばかりぞきこえける春のいたらぬ人のやども（後拾遺第一・春上・二二・清原元輔）

このケースは、先述したように、句切れの認定基準に取り込まれている。一方、係り結びの形式をとっていないのに連体形で言い切りになっている次の一首

こりつめてまきのすみやくけをぬるみおほはら山のゆきのむらぎえ（後拾遺第六・冬・四一四・和泉式部）

の二句「まきのすみやく」の「やく」（カ行四段活用）の他動詞「焼く」の連体形）についても同様に「文法的に見て句が切れている」の範ちゅうに含めてよいように思う。

逆に、領域Ⅲについては、仮に文の切断があっても核文の成立と独立が確認され難いものにあっては句切れを認めないという厳格な立場が求められる。例えば、次の一首

としのうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむ（古今卷一・春歌上・一・在原元方）

の二句「春はきにけり」の後に句切れを認定することに異論はないが、四句「こぞとやいはむ」の後で切ることに疑問がある。この部分を「ひととせをこぞとやいはむ」「ひととせをことしとやいはむ」という二つの文が連続し、かつ、後出の「ひととせ」を同一語句の反復として省略したものと考えることは文法的には可能であるが、このような省略は文が続いているからこそできるのである。また、次の歌。

なけやなけよもぎがそまのきりぎりすすぎゆく秋はげにぞかなしき（前出）

とめこかし梅さかりなる我がやどをうときも人はをりにこそよれ（新古今卷一・春歌上・五一・西行法師）

この二首については、①核文の成立と独立という観点から見れば三句切れ、②「文の言い切り」という観点から見れば初句・三句切れという二通りの区切り方が考えられるが、「意味上の切れ目」は核文を含む単位文一つにつき一つであって複数ある筈もなく、従って、倒置表現がとられたからといって句切れが複数になるというのは論理的にも無理がある。

② 句切れの位置の決定

かくして句切れの位置は、原則、「文の言い切り」を含む単位文の直後、引き続き後文の直前ということになるが、当該単位文の主部（語）が倒置法などにより引き続き後文の主部（語）と重合する場合には、例外的に、「文の言い切り」の直後とする必要が生ずる。例えば、次の歌。

君ならで誰にか見せむ梅花色をもかをもしる人ぞしる（古今卷一・春歌上・三八・ものり）

あかざらばちよまでかざせもの花はなもかはらじはるもたえねば（後拾遺第二・春下・一二九・清原元輔）

一首目「梅花」、二首目「もの花」のように、前の単位文の主題を構成する部分（当面、「主題部」と仮置きしておく。）が後の単位文の主題部を併せ構成する場合には、前の単位文の主題部の後に句切れを認めることは適当でないと考えられるからである。

三、結び（認定基準私案の評価）

認定基準私案の評価を巡っては、二つほどの視座を設定できると思う。一つには従前の認定基準がもつ認定のかたよりの是正、二つには定義と認定基準との理論的整合である。

前者については、従前の認定基準で制限的であった領域Ⅱにおいて、句のおわりの連体止め、連用中止形を「文法的に

見て句が切れているもの」の範ちゅうに含めることによる認定増、逆に、緩和的であった領域Ⅲでは句切れの数を単位文一つにつき一つ以内に限定することによる認定減がそれぞれ見込まれるので、増減併せて認定のかたよりが是正されるであろう。また、後者については、定義を「核文の成立と独立の確認」をもって十分条件に、認定基準を「文の言い切りの認定」をもって必要条件として取り扱うことにより、文論上・語論上一応の整理ができたと考えるものである。

〔注〕

(1) 江湖山恒明『時代別・作品別解釈文法』昭五八・一・至文堂・一四八頁最終行から一四九頁一七目行まで。

(2) 大久保忠利『増補版 日本文法陳述論』昭五七・八・明治書院・四四四頁五行目から四四五頁三行目まで。四五〇頁六行目から四五二頁一六行目まで。

付記 稿者による引用歌は、いずれも『新編国歌大観』第一卷(昭五八・二)、第二卷(昭五九・三)・角川書店から原文のまゝ転記した。

A study regarding the acknowledgment of "KUGIRE" or individual sentences in classical 'waka': A plan for a revision of the acknowledgment standard...ASAOKA Sumiaki